



こそだて通信

かしのき保育園 2011年度 No.6

== 生きづらくとも ==

あっという間に今年ももう3月となりました。

すかんぼさんは、今月を最後にかしのき保育園を巣立っていくのですね。寂しくもありますが、皆さんの成長した姿を本当に嬉しく感じます。

今年度最後のごあいさつに代えて、最近私自身が励まされた、田中康雄先生（児童精神科医 北海道大学付属子ども発達臨床研究センター教授）の言葉をご紹介します。

先生が長年見守ってこられた、ある親子のエピソードです。

『～ 母親も実は最初から気丈夫だったわけではなく、わが子の育ちの過程の中で、周囲に笑顔を、気丈さを、伝える人へと育っていった。

生きづらさは、生き続けていると、自然に薄まるときもある。

濃く出るときもある。それは生きているという証でもある。

必要以上に生きづらさを恐れることなく、

しかし、我々がかかわり続け支えあいながら、

共に生きていきたい。

母親が示し続けた信頼と忍耐は、

時とともに補強され豊かになっていった。

それは、人生のささやかな、しかし、確かな喜びを親子にもたらした。

今も彼は、生きづらさを持ちながら豊かに生きている。

（教育 2011.11月号 No.790 国文社）』

誰しも多少は、生きづらいつらいと思いながら毎日を生きているのではないのでしょうか。生きづらくとも豊かに生きていける、そう思えば、人生は違ったものとなるのかもしれませんが。

これからもお子さんの人生が豊かでありますように、心から願っています。

（臨床心理士 藤井あづさ）